

## 江戸絵図にみる都市イメージ表現に関する基礎的研究

### A Basic Study on the Image of the City Drawn on the Picture Maps of Edo

○石川柚希<sup>1</sup>, 天野光一<sup>2</sup>, 阿部貴弘<sup>2</sup>\*YuzukiIshikawa<sup>1</sup>, KoichiAmano<sup>2</sup>, TakahiroAbe<sup>2</sup>

Abstract: The purpose of this study was to clarify the method to draw images of the city on picture maps in order to find the way to share the images. In this study, the Edo-zu Byobu and Edomeisyo-zu Byobu, both of which are folding screens, were analyzed. As a result, it has been found out that urban facilities, such as bridges and open spaces, were drawn together with people's activities and infrastructures, such as waterway and main streets, were described as a "PASS" of the city.

#### 1. はじめに

まちの将来像を描く場合、従来の手法では、都市全体を描く場合はゾーニング、地区レベルを描く場合はパースやCG、写真を使用することが多い。しかし、このような表現手法では都市のイメージを共有しにくい場合がある。そのため、都市のイメージを共有しやすくするためにどのような手法があるか、また、どうすれば都市のイメージを共有できるのかが模索されている。

一方、江戸時代には都市のイメージの表現方法の一つとして絵図、屏風が描かれた。絵図、屏風は、作成主体がその目的に応じて、あるがままの景観から取捨選択した図像、あるいはある価値体系によってイメージ化された図像である<sup>1)</sup>。そのため、都市のイメージの共有に資するものであったと考える。そこで絵図、屏風の構成を明らかにすることは、都市のイメージを共有しやすくする表現方法の構築に繋がると考える。

このような背景から、本稿では、絵図の描画対象、構図等の分析に基づき、絵図を描く際の都市イメージ表現の手法を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究対象

本稿では、絵図の中でも、都市全体から個別の地区まで詳細に描かれている屏風絵図を対象とし、それらの屏風絵図のうち、江戸初期に描かれた「江戸図屏風」(Figure 1) 及び「江戸名所図屏風」を対象として分析を行った。



Figure 1. Edo-zu Byobu

#### 3. 研究方法

本稿では、次の3つの視点から分析を行う。

##### (1) 描画対象の分析

描画対象の分析にあたっては、「江戸図屏風」に描かれた押紙を抛り所として、両屏風の描画対象を抽出し、それらの属性に着目した分析を行う。

##### (2) 金煙によるまとまりの分析

江戸初期の屏風には、ある領域もしくは描画対象を金煙によってひとまとまりに括るという描画手法があった。この金煙によるまとまりの分析にあたっては、個々のまとまりの中に描かれている描画対象の特徴を明らかにするとともに、各まとまりの描画位置やまとまりとまとまりとの隣接関係についても分析する。

##### (3) 都市イメージ表現の分析

都市イメージ表現の分析にあたっては、都市のイメージを構成する要素として、パス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークに着目し、両屏風においてそれらの各要素に位置付けることのできる描画対象を江戸名所図会を参考に抽出し、要素と対象との関係を明らかにする。

#### 4. 研究結果及び考察

##### (1) 江戸図屏風

Table 1. Objects Drawn on the Edo-zu Byobu

描画対象		件数(件)
将軍家	家光の実績	2
	家光の行動	10
	江戸城	7
	重臣関係	40
社寺	将軍家に関わりの深い社寺	21
	庶民寄りの社寺	2
	不明	1
町人地	宿場	2
	商店	1
	物資の集積場	3
インフラ		11

Table 1 は江戸図屏風の描画対象である。100 か所の

描画対象中、59 か所が将軍家に関する描画対象であった。描画面積としても将軍家に関わるものが多くを占めていた。

描画位置や金煙のまとまり同士の隣接関係は、実際の位置と類似する位置関係で描かれていた。このことから、実際の隣接関係を保つことを意識して描かれたと考える。

描画内容としては、まず、江戸城が最も大きく描かれていた。このことから、江戸図屏風では、江戸城が別格の扱いであったと考える。また、家光の実績、行動、重臣関係といった、将軍家に関わるものも多く描かれていた。一方、物資の集積場、宿場、物資の運搬の様子、商店街の賑わい、庶民寄りの社寺と周辺の町では、賑わう人々の様子など、賑わいのある地区としてのまとまりが描かれていた。

都市イメージ表現としては、まず、江戸城が最も大きく描かれていたことから、江戸城が江戸図屏風全体でのランドマークであると考えられる。さらに、街道、河川、堀割運河等のインフラが、金煙でくくられた1つのまとまり内で完結するのではなく、まとまりとまとまりを繋ぐように描かれていた。これは、こうしたインフラが、地区と地区を結ぶパスの役割を担っていたためであると考えられる。物理的なエッジとしては隅田川が描かれていた。一方、各まとまりでは、橋梁や社寺が、「～のあたり」という界隈を象徴する目印、すなわちランドマークとして描かれていた。また、各まとまりは明確なエッジで区分されるのではなく、ランドマークの境界が金煙によって曖昧に区分されていた。

(2) 江戸名所図屏風

**Table 2.** Objects Drawn on the Edomeisyo-zu Byobu

描画対象		件数(件)
将軍家		3
社寺	将軍家に関わりの深い社寺	7
	庶民寄りの社寺	1
町人地		3
インフラ		7

Table 2 は、江戸名所図屏風の描画対象である。庶民の賑わいを描いた江戸名所図屏風だが、21 箇所の描画対象中、町人地は 3 箇所と少なかった。一方、名所と呼ばれる社寺や日本橋通りといった主要インフラが、庶民の賑わいの場として描かれていた。描画面積は、庶民に関わるものが大半を占めていた。

描画位置や金煙のまとまり同士の隣接関係は、町人地では、浄瑠璃、歌舞伎などが隣接して描かれており、娯楽施設以外は省略されていた。しかし、各屏風対象の配置位置は、実際の位置と類似した場所に描かれて

いた。このことから、江戸図屏風と同様に、実際の隣接関係を保つことを意識して描かれたと考える。

描画内容は、喧嘩や歌舞伎といった娯楽、社寺での祭りなど、庶民のアクティビティが主に描かれていた。それとは対照的に、将軍家に関わりがあるものは、人氣がなく、全体的に小さく描かれていた。

都市イメージ表現としては、街道、河川、堀割運河等のインフラが、金煙でくくられた一つのまとまり内で完結するのではなく、まとまりとまとまりを繋ぐように描かれていた。これは、こうしたインフラが、地区と地区を結ぶパスの役割を担っていたためであると考えられる。物理的なエッジとしては隅田川、三十間堀が描かれていた。一方、各まとまりでは、社寺は、「～のあたり」という界隈を象徴する目印、すなわちランドマークとしての役割を担っていた。橋梁もランドマークとしての役割を担っていたが、社寺と比べると補助的なものであった。各まとまりは明確なエッジで区分されるのではなく、ランドマークの境界が金煙によって曖昧に区分されていた。一方、描画対象同士の距離が近い場合は、金煙ではなく樹木によって区分し、省略をしていた。

5. まとめ

江戸図屏風、江戸名所図屏風の分析から、江戸初期の屏風を描く場合、描画面積は目的に沿って違うものの、将軍家に関わる場所と、町人に関わる場所は、明確に区別して描く傾向があった。

町人地では、明確なエッジで区分するのではなく、金煙で曖昧に区分し、「界隈」もしくは「～のあたり」ともいふべき、地区のランドマークとその周辺を1つのまとまりとして描いていた。

金煙によって曖昧に区分された各まとまりの配置は、実際の位置関係と類似していた。

さらに各まとまりを描く際は、場所や施設だけではなく、そこで展開される活動も一緒に描いていた。

都市イメージ表現としては、街道、堀割運河、河川といったインフラが、パスとしての役割を担っていた。

6. 参考文献

[1] 小野寺淳: 絵図に描かれた自然環境—出羽国絵図の植生表現を例に、歴史地理学 172, pp.21, 1995  
他